

平成20年度 富山県立富山高等学校 アクションプラン 評価

平成20年度 富山高等学校アクションプラン -1-	
重点項目	学習・進路の意識付け
重点課題	家庭学習時間の充実
現状	4月と9月に実施している本校の「学習生活実態調査」によれば、家庭学習時間は1週間の平均で1、2年生が3時間余り、3年生が4時間前後である。部活動や学校行事に積極的に取り組んでいる姿勢は評価できるが、週末の過ごし方に工夫が必要である。
達成目標	家庭学習時間を1週間の1日あたりの平均時間(継続) 4時間程度
方策	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の共通理解の下、面接などを通して、生活スタイルの見直しや改善をはかるよう指導する。 ・意欲的に学習に取り組むことができるよう、課題の与え方に工夫をこらす。 ・部活動時間などのルールを徹底し、生徒に学習時間確保の保障を与える。 ・互見授業など様々な機会をとらえて教員の授業力向上に努める。 ・教員の作問能力を向上させ、生徒の学習意欲を喚起するよう努める。 ・本校の教育課程(7限授業など)について、研究をすすめる。
達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・4月の学習生活実態調査の結果(昨年度) 1年:3時間16分(3時間25分)、2年:3時間23分(2時間53分)、3年:4時間7分(3時間58分) ・9月の学習生活実態調査の結果(昨年度) 1年:3時間9分(3時間10分)、2年:3時間12分(3時間3分)、3年:4時間34分(4時間24分) <p>全体として昨年度と大きな違いはみられなかった。</p>
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・学習生活実態調査の結果を学級保護者会や学年保護者会で報告し、保護者の方の協力が得られるように理解を求めた。 ・生徒の実態について学年会で協議し、問題点を共有するよう努めた。 ・個々の生徒の実態に即した面接を心がけた。 ・教育課程委員会等で本校のカリキュラムについて協議した。
自己評価	<p style="text-align: center;">C</p> <p>学習時間については、昨年度と大きな違いは見られず、現状を維持していると判断した。</p>
学校評議員などの評価	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の社会環境・家庭環境の中で、これだけの家庭学習時間を確保していることは、高く評価できる。 ・時間の確保なのか、学習の質の充実なのかという問題は、常に検討していく必要があると思われる。 ・教員自身が、互見授業や授業評価を通じて、授業の質的改善に努めていくことは、結果的に生徒の学習意欲の改善につながるので、学校として組織的な取り組みを続けてほしい。
次年度への課題	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒個々の学習に対する取り組みに差異がみられ、課題の与え方などを抜本的に見直す必要がある。 ・まじめに取り組んでいるが成績に結びつかなくなったりすることで、悩みを抱えたり、自己嫌悪におちいるなど、不安定になる生徒も見られる。教育支援部と連携をとりながら、教員のコーチング技能を高めることが今後より一層重要と考えられる。 ・担任だけでなく各教科担当者が、個々に話を聞く機会を今以上に増やす必要がある。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

平成20年度 富山高等学校アクションプラン -2-	
重点項目	確かな学力の保障
重点課題	第一志望を叶えるための「確かな学力」を保障する学習内容とその方法の構築
現状	昨年度は、国公立大学を受験した生徒の40%が第一志望を叶えることができず、他の進路(私立大学、など)を選択している。国公立大学を第一志望とする個々の生徒それぞれの進路実現のためにルート(道)を明確にし、志望のレベルに応じた学力を保障する必要がある。
達成目標	国公立大学進学人数(実進学人数)が受験者数(実受験者数)に対し 3分の2以上
方策	出口(大学受験)での第一志望を叶えるための「確かな学力」を個々の生徒に対して保障するために、学年及び教科担当者による分析や指導を計画的に行う。学年内の横のつながりだけでなく、教科を柱とした縦の接続を意識した学習内容とその方法の構築を検討する。
達成度	国公立大学実受験者数262名に対して、合格者は182名(前期137名、中・後期45名)となり、その割合は69.5%であった。
具体的な取組状況	3学年においては、考査・模試の事前準備、事後指導を計画的に指導する。特に事後指導では「復習ノート」を作成・配布し、誤答問題の復習の徹底を図る。また、昨年に引き続き、教科主体の添削指導を実施する。 一方、教科担当者は教育研究セミナー(駿台)や授業力向上セミナー(代ゼミ)への参加を通して、授業力の向上を図り、解法の探究や教授法の改善に努める。また、その成果を3年生特別講座や自学講座で生徒に還元するなどの工夫を行う。 なお、国公立大学出願状況については、第1志望大学へ出願した者は82.6%である。センター試験自己採点結果および出願校判定会議でのアドバイス等を踏まえて、第1志望を変更した者が約17%となった。
自己評価	B 面談回数を増やし、粘り強く第一志望をかなえるように指導した。また、様々な指導力向上の取り組みによって得た知見を、添削指導などにつなげた結果、多くの生徒たちが地元大学から難関大学まで、志望の大学に合格・進学することができた。
学校評議員などの評価	・生徒たちの、進路に対する夢を叶えるという観点からすると、指標として国公立大学だけを掲げることが適切なのか、検討を進めてほしい。 ・学力の保障を量る、有意な数値目標の設定の検討が必要である。
次年度への課題	・多様な学力の生徒が入学してきている現状を踏まえ、生徒の意欲を尊重し、より系統的に学力をつけていくような、中高接続・連携が必要である。 ・授業等での生徒の反応から、生徒の視点を探るなどより一層の授業の改善を図る。 ・定期考査や実力テスト、模擬試験等の作問能力を向上させ、明示した目標に対する習得方法や説明し、達成度を判定する。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

平成20年度 富山高等学校アクションプラン -3-	
重点項目	規範意識・安全意識の高揚
重点課題	規範意識、安全意識を高め、登下校時の自転車の交通事故の発生を防ぐ。
現状	昨年度は14件、一昨年度は19件の自転車事故が起きている。特に、入院を伴う大きな交通事故も起きている。多くは登校時、下校時の接触事故であり、何とか自転車の交通事故を防ぎたい。
達成目標	年間を通じて無事故で登下校する生徒の割合 99%以上
方策	1 朝、生徒指導部でできるだけ東門の前に立ち、挨拶を交わすと同時に身だしなみを整えさせる。(規範意識) 2 車の交通量の多い東門前およびその東側交差点においては特に危険な箇所であることを認識させ、信号無視や道路の斜め横断などさせないようにしていく。(規範意識、安全意識) 3 遅刻ぎりぎりに登校する生徒に対しては余裕を持って行動していくよう訴えていく。(安全意識) 4 一年に二回行っている自転車の車体検査をより有効にするために不備な自転車については期日を守って修理させるよう強く促していく。(安全点検)等、より具体的な方策を実施する。
達成度	交通事故の件数でいえば3月19日現在で、12件(無事故の達成率98.6%)起きている。昨年より少しは減ったが、到達目標である99%以上という目標は達成できなかった。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全教室の実施(今年度は10月24日に1,2年生対象に実施) 自転車の安全運転やマナーについて事例を交えながら、警察署の方による講話の実施 東門や正門になるべく立つことにより、自転車のかさし運転や美容院横の交差点での信号無視や斜め横断がないように指導してきた。 必要に応じ、生徒指導通信を発行したり、各学期の終業式の日には生徒指導部長が全校生徒に無事故をめざすよう訴えてきた。
自己評価	<p style="text-align: center; font-size: 2em; font-weight: bold;">C</p> <p>生徒指導部としては、生徒の自転車事故の防止をいろいろな機会を通し訴え、さらにほぼ毎日校門に立ち、交通安全に取り組んできたが、結果的には目標を達成できなかった。ただ、現在、骨折を伴うような大きな事故が起きていないことは取り組みの成果であると考えている。</p>
学校評議員などの評価	<ul style="list-style-type: none"> 目標を達成した、しないということよりも、教員の日々の粘り強い取り組みを高く評価したい。 生命の重さや、軽率な行動によって重大な事故に至ることなど、様々な角度からの啓発活動と並行して、常に安全への意識を高めるような組織的な指導を継続してほしい。
次年度への課題	<ul style="list-style-type: none"> 交通事故はどこで起きるかわからないので、朝、毎日校門に立つことが果たして交通事故防止につながっているのかはよくわからないが、放っておけば、以前のように20件近くの交通事故が起きることが予想されるので、今後も継続してできることから取り組んでいくことが大切だと考えている。 校門に毎日のように立っていても、雨の日にかさしで来る生徒がいたり、斜め横断や信号無視があったりする。特に南富山駅から北に進む道路や美容院横の交差点など朝のラッシュ時は非常に危険な場所である。まずは交通のルールをきちんと守る規範意識をしっかりと生徒に根付かせることが大切であると思う。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

平成20年度 富山高等学校アクションプラン -4-	
重点項目	積極的な健康づくりへの意識を高める
重点課題	むし歯治療への意識を高める
現状	ここ数年の、う歯や歯周疾患などの治療率は、30～40%程度にとどまっている。う歯は減少傾向であるが、歯周疾患が増加している。歯・口腔の健康は、基本的な生活習慣と深くかかわっている。まずは、う歯の治療の徹底が課題である。
達成目標	むし歯治療への意識の高まりと治療率の向上 むし歯治療率80%以上
方策	1 歯科口腔への意識を高めるために、生徒の興味・関心を引く、保健だより等を発行する。 2 う歯の再治療勧告を、保護者会の折りに行き、保護者の協力を得てすすめる。 3 治療カードの様式を工夫し、具体的なむし歯の位置を知らせ、早期の治療をうながす。 4 歯周病に関する知識、情報を与え意識を高める。 5 「歯と口の健康づくり」の観点から、口の機能である咀嚼について考えさせ、嚼むことによって全身の健康づくりや生活習慣病の予防につながることを理解させる。
達成度	1月末治療完了者は63%、現在治療中の者を加えると67.3%になった。治療勧告を受けたことによって「これから、受診するつもりである」と具体的に歯科医院名を記入した生徒を加えると79%になった。
具体的な取組状況	歯科検診結果の数字を具体的に保健だよりで知らせると共に、未治療者に対し3回治療カードの再発行を行い治療勧告した。今年度は昨年よりさらに歯垢・歯肉炎の生徒が増加したため、ブラッシング指導を実施した。治療勧告を目的にした、治療状況の確認アンケートを2回実施し、具体的な治療計画を提出させた。担任を通じ、保護者会の折に治療カードを渡し保護者の協力を得た。
自己評価	B 目標値の80%には及ばなかったが、治療カードを配布した370名に対して治療率約68%、受診予定者を含めると約8割に達するのは、評価できる数値である。
学校評議員などの評価	・生徒たちに健康な生活を意識させるときに、むし歯治療ということのみを取り上げるのは、適切かどうかを検討してほしい。 ・取り組みは、意欲的であるが、高校生ならば各自が自分の健康を意識して100%に限りなく近づけることが求められるような気がする。また、生活習慣という広い視野にたつて、むし歯は人の健康を左右するものであるというような観点での指導もあっても良いと思われる。
次年度へ向けての課題	歯科の治療、受診は治療時間の確保と治療費の負担という要素が加わるため、80%台の設定はかなり高いハードルであることを実感した。しかし、歯科治療に対する生徒、保護者の意識は高く治療勧告の時期を工夫すれば、それも可能であると思われる。1月末で「受診の予定はない」と答えた生徒は20%で、それらの生徒たちに対して治療しない理由をアンケートで尋ねたところ、部活動や塾・勉強で忙しく時間がないが約7割であった。治療勧告の時期を生徒の学習や行事の多忙期を避け、年間計画に位置づけることが必要である。歯周疾患の増加が予想されるので、ブラッシング指導を年間計画に組みこんでゆきたい。今年度は、咀嚼について考えさせる働きかけまで至らなかった。次年度への大きな課題である。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

平成20年度 富山高等学校アクションプラン -5-	
重点項目	生徒に対する積極的な教育支援
重点課題	生徒の自己肯定感や学校適応感を高める。
現状	従来は、担任との面接(簡単な示唆と方針の提示)で、多くの生徒は自らの方向を手探りしながらも見つけて身を処していたのだが、担任の面接だけでは状況改善の機会を逃してしまう事例も散見されるようになってきた。そうした事例に、すばやく適切に対処していくことはもちろんであるが、それ以前にそういった状況に生徒が陥ることを予防し、生徒の自己肯定感や学校適応感を高めていく積極的な支援が望まれている。
達成目標	ストレスに対する対処の仕方や望ましい自己表現を身につけようとする生徒の割合。 80%以上
方策	1 ストレスや対人関係の悩みを抱えている生徒に対し、生徒支援プログラムの実施や生徒支援だよりの発行などによって、それらに対処するための具体的、体系的なスキルをまず知識として与え、その後、実際に体験させる。 ・学習する項目やスキル…ストレスの概念、自分のストレス反応、さまざまな対処法 相手の立場や心情に配慮しながら、自分の気持ちも適切に伝えるやり方 2 スキルを学習し、実際に体験したことによって、生徒にそれらを身につけようとする気持ちが起こったかを調査する。 ・ストレスに関する調査については、昨年度の結果とも比較してみる。 3 現在葛藤がない生徒に対しても、開発・予防カウンセリング教育として実施する。
達成度	・生徒支援プログラム(講習会)実施直後に、生徒に対してアンケートをとった。 「ストレスを感じたとき、実際にさまざまな対処法をとってみようと思う」80%(とても、まあまあ) 「これからアサーティブな伝え方を心がけていきたいと思う」85%(とても、まあまあ) ・さらにそれぞれの学期の終わりに、客観的な質問紙を用いて、実際にスキルが生徒の身についているかについて追跡調査を行ってみた(対象は1年生)。 ・望ましいストレス対処が身についている生徒 20年度…54.2% 19年度…42.1% ・アサーションについては、状況改善のために他に働きかけようとする因子を構成する項目に増加傾向が、自己の権利を主張し抗議しようとする因子を構成する項目に減少傾向が見られた。
具体的な取組状況	・毎月生徒支援だよりを発行し、1学期はストレスマネジメント、2・3学期はアサーション、セルフコーチングについての知識を与えた。また支援だよりを通じて時期に応じた言葉掛けを行ったことは、特に1年生の初期指導に効果があった。当初は「読んでいない」と答えた生徒が25%はいたものの、「みんな同じように悩んでいることがわかって安心できた」という意見が多かった。ちなみに1月調査では、「読んでいる」と答えた生徒は96%に上昇している。 ・1・2学期に上記のテーマについて生徒支援プログラムを実施し、生徒に実際に効果を体験させた。 ・各学期に1度教員を対象に研修会を開き、意識とスキルの向上を図るように努めた。 ・全校生徒の出欠を把握して心に課題を抱える生徒を早期に発見し、適切な対応がとれるように校内体制を整えた。 ・学年や各分掌と連携をとり、協同して心に課題を抱える生徒の対応に当たった。専門家や外部機関との連携は特に有効で、明確な方針のもとに的確に対処していくことができた。
自己評価	B 生徒支援プログラム実施直後のアンケート調査によれば、身につけようとする意欲については目標値を達成している。しかし客観紙による調査からは、望ましいストレス対処が身についている生徒数が12%も増加したものの、依然として半数の生徒が「疲れている」「何もかも嫌だ」「頑張れない」と訴え、「つらいことは自分の心の中にしまいこむ」というような対処しかとれず悩んでいることも伺える。ただ、生徒支援という視点で様々な取り組みを行ったのは、今年度が最初であり、学校として一つの指標を得たと考えられる。
学校評議員などの評価	・今日的な課題に対する、適切な対応や教員の意欲的な研修は高く評価できる。数値目標の設定の仕方については、今後検討して欲しい。
次年度への課題	生徒に予防的なかかわりをしている場合、していない場合と比べて何かあった時の対処が何倍も軽くて済むと言われている。次年度も効果のあがる手法をさらに研究し、予防教育として取り入れていく必要があるだろう。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)